

## 梨木香歩「村田エフェンディ滞土録」

私たち読者は、心してこの作品の語り手の世界に近づいてゆかなければならない。通常の小説のように親しみやすく、すぐ感情移入し易いようにと親切には書かれているわけではないからだ。作品が始まった段階では、語り手の生きる時代がまず不明瞭である。また彼の年齢もそれほどはっきりとしているわけではない。語り手の語り口が大人びているので、私たちの「青春」のイメージにすぐに一致してこないのだ。作品の末尾において、彼が青春時代をトルコで過ごしていたことが劇的に印象づけられるだろう。そしてここに至って遂に、その道程こそ、つまり遠い隔たりを認識した上で、その遠さを超えてゆく道程こそが、この作品のテーマだったのだということが分かるのである。

文体の古めかしさは、まさに私たちの時代との隔たりと、私たちが日頃親しんでいる「青春」についてのステレオタイプな印象からの隔たりとを、同時的・効果的に生成する真犯人なのである。

「ディクソン夫人」の下宿で、様々な人種国籍の若者たちが一堂に会し、その場から幸福を汲み上げていった。青春とはそのような、同じ場所に発見されたそれぞれの幸福を意味するのだろうか、果たしてその実質はどのようなものなのだろうか。

若者たちは、十分に成熟した大人のように、就いている仕事やその地位により強く束縛されることがない。家庭を持つことにより家族から制約を受けることもない。青春が体験されるためにはまずはそのような人々が必要だ。しかし年齢は本質的な条件ではないだろう。確かに年齢が積み重なれば、様々な限定もまた自然に積み重なるのが通例であるから、両者は通常関連性を持つのだが、しかし、厳密に言うならば、年齢は無関係だ。様々な制約から逃れていること、ある曖昧な領域で世の中を生きているということが重要だ。

主人公の語り手自身も、日本に帰ってからはさすがに真田教授に絡め取られてしまい、青春時代を過ごすための条件を剥奪されてしまう。

しかし、トルコでは、彼は違っていた。そして私たち読者も、作品を読み進める過程で自分が背負っている様々な限定を、次第にかなぐり捨てるようにして、語り手の世界へと身を寄せてゆく。

その結果私たちが作品を通して擬似的に経験するのは、一つの経験の受容を巡って、国籍がどこであろうと、人種がどうであろうと、どんな信仰の持ち主であろうと、そこにある経験の質を変えてしまう作用を必然的に持つわけではないのだという深い理解なのだ。ほとんど、人間であるか動物であるか、生きているか死んでいるか、神であるか地上のものであるか、といった差異でさえも、その経験の受容に対して影響を及ぼすことは必然ではないということを理解するのである。

それらすべての限定を跳び越えてゆく共同体験があり得るのだ。それこそが青春というもの神秘的な本質なのだ。そこでは一人一人が生きている孤独で利己的な「私の世界」と、一人一人が別個に共有する「私たちの世界」とが、短い期間、特定の場所を巡り、見事な釣り合いを見せて共存するのである。

文化的な限定や生活史からやってくる限定、性別や階層、親の職業、その他ありとある限定を負って私は生き、それらの差異によって他者と関係し「私たちの世界」を生きている。その時、私と他者との間には著しい差異がある。そして私たち一人一人の上には、これまでの

自分が編み上げてきた私の唯一の世界の孤独もある。つまりは互いに途方もない遠方を生きているはずの複数の人々がいる。その人々が一堂に会するある特定の時と場所との上で、「私たちの世界」があたかもたった一つの「私の世界」の内部に息づいているかのような奇跡的な出会いを見せることがある。一つの経験を通して、みながそれぞれの幸福を、しかし共に吸い上げるという希有な経験を、私たちは青春と呼ぶのではないだろうか。